

「ショパンのアンサンブルを、19世紀のサロンの響きで」 「音楽のまち」浜松からの文化発信をめざして

小岩 信治

文化政策学部芸術文化学科

平野 昭

文化政策学部芸術文化学科

静岡文化芸術大学の室内楽演奏会¹は、二〇〇六年二月二六日にアクトシティ浜松音楽工房ホール、三月一四日に東京・第一生命ホールで行われた。浜松公演は満席となり、盛況となった東京公演は後日NHK-BSで放送された。本学と浜松市楽器博物館、NPOトリトン・アーツ・ネットワーク/第一生命ホール、そして小倉貴久子ら国際的に評価された演奏家による、ユニークなプロジェクトであった。

この演奏会は、一九世紀のピアノ付き合奏音楽を主要研究領域とする筆者たちの研究成果を示していた。一八三〇年代にショパンのピアノ協奏曲は、オーケストラ音楽としてだけでなくピアノ六重奏曲としても出版されていた(本学紀要二〇〇四年)。今回の主要演目である彼の《ピアノ協奏曲第一番》(本学作品一「ドイッツ初版(一八三三)に基づく五重奏伴奏付き」は、ブレイエルが一八三〇年に製作したフォルテピアノで鳴り響いたとき、強い印象を人々に与えた。この編成でのピアノ協奏曲の、オーケストラ版とは異なる魅力が証明されたと言える。

二〇〇六年三月一四日の夕刻、東京・第一生命ホールの舞台裏で小さなミーティングが行われた。東京都中央区立日本橋小学校の小学生数人がフォルテピアノ奏者小倉貴久子と挨拶を交わし、生徒たちに付き合う母親たち、引率の教員とともにトリトン・アーツ・ネットワーク(TAN)のスタッフ、そして本学芸術文化学科の学生四名がそれを見守っていた。

児童たちが小倉に会うのは初めてではなかった。これに先立つ三月二日、日本橋小学校で行われたTAN主催のアウトリーチ活動があり、小倉がニクラスの児童に現代のピアノと一九世紀のピアノの違いを実演して示した。彼女の演奏と話を学校で直接聴いた児童たちは、ショパン時代のピアノ音楽を当時の楽器で演奏することに興味をもったのである。そして二日後、本学・TAN/第一生命ホール主催の「ショパンのアンサンブルを、19世紀のサロンの響きで」東京公演を、TANに招待されて訪れていた。夕刻に行われたこのミーティングは、アウトリーチ活動に「応えて」第一生命ホールにやってきた児童たちの

ため演奏会直前に行われた「ウエルカムセッション」であった。

本研究「ショパンの協奏曲『室内楽版』演奏会」は、西洋音楽史の研究活動であるとともに大学および地域の広報活動であり、また芸術文化学科の教育活動でもあった。この複合的なプロジェクトのありようを、右のシーンは象徴していたように思われる。アートと社会を結びつけるアーツ・マネジメントの学科から発した歴史研究、およびそれに結びついた演奏活動が、プロフェッショナルな演奏会マネジメントの組織で活用され、それが芸術文化学科の教育の場として活かされていたからである。

以下では、第一節として本研究の特色をまとめ、第二節でその成果を、地域・大学の広報としての部分、教育的な部分と音楽史研究のそれに分けて論じる。付録として公演のデータと公演会場でのアンケートの結果の抄録、そして演奏会批評を掲載している(批評については各雑誌・執筆者の許可を得ている)。

1 本研究の特色

浜松は長らく「楽器(づくり)のまち」として知られてきた。中心的な製品は、最近ではさまざまな電子楽器に移りつつあるが、基本的にピアノであった。浜松地域において一河合楽器電洋工場のある磐田市も含めて一世界のメジャーに数えられる、楽器生産技術の集大成としてのピアノが生産されている。しかし同じ浜松のなか、具体的にはアクトシティの中に浜松市楽器博物館があり、その所蔵楽器によって、私たちはピアノ音楽史の展開を垣間見ることが出来る。

浜松にいるわれわれは、西洋音楽史の生み出した最大の発明である

ピアノとその音楽について、単に名曲を楽しむだけでなく、音楽文化史の奥行きを理解しながら楽しむことができる。そのような、他のまちにはない素晴らしい環境にいることを示すべく、本研究では三つの組織と演奏者が関わった。クラシックの演奏会のスキームとして、これはかなり例外的な、複雑な形態と言える。

1-1 ショパンのピアノ協奏曲の「室内楽版」とは

フレデリク・ショパン Chopin (一八一〇～四九) の《ピアノ協奏曲第一番》亦短調作品一は、《第二番》へ短調作品二とともに、今日の西洋芸術音楽（クラシック音楽）の演奏レパートリーのなかで確たる位置を占め、多くの人々に愛好されている。ピアノ協奏曲という曲種の性質上、ピアニストの演奏技術を試すための音楽となり、ショパン国際ピアノ・コンクールをはじめとするピアノ・コンクールの最終審査でしばしば演目に挙がっている。しかしショパンが一八三〇年前後にこれらの作品を書いた頃、ピアノ協奏曲というジャンルは今日のそれとは異なる機能を音楽生活のなかで果たしていた。多くのピアノ協奏曲が、今日のようにフル編成のオーケストラを揃えずとも、ピアノと数人の弦楽器で演奏可能な音楽となっていた。ピアノ協奏曲はそのようなものとして家庭やサロンで演奏されたほか、公の場でもそうした室内乐的な音楽として演奏された。トランペットなど管楽器を揃えた大オーケストラで演奏する機会が限られていたなかで、こうした演奏を可能にする「ピアノと数人の弦楽器のための出版譜」が販売されており、大編成のオーケストラを用意することが今日よりはるかに困難であったと見られる当時、そのような楽譜が音楽を流通させるメディアの役割を果たしていた。（これについては小岩信治「ショパン

のピアノ協奏曲の『室内楽版』——よみがえる一九世紀の演奏習慣——『静岡文化芸術大学研究紀要』第五巻（二〇〇五）所収、および小岩信治「転換期のピアノ協奏曲——ショパンの『ピアノ協奏曲第一番』亦短調作品11とその『室内楽版』について」『新世紀の音楽学フォーラム 転換期の音楽 角倉一朗先生古稀記念論文集「音楽之友社、二〇〇二」所収を参照のこと。なお、以下においてショパンの『ピアノ協奏曲第一番』『室内楽版』と言う際には、この曲のドイツ初版（ライプツィヒ、一八三三）を用いて、その表紙の文言に従って「弦楽 五重奏の伴奏で」この曲を演奏することを指す。

1-2 浜松市楽器博物館の参画——歴史的ピアノ使用の意義

一九世紀序盤の楽譜出版を考慮しながら室内楽としてのショパンのピアノ協奏曲を（復元）演奏する試みは、すでに一九九〇年ころから見られる。しかしそれら散発的な演奏・録音のなかに、ショパン時代のピアノを使ったものは確認できない。今回の研究が画期的であるのは、ショパンの協奏曲の「室内楽版」演奏のために、ショパン時代のピアノ（歴史的ピアノ）を使うことであった。というのも、通常のフル編成オーケストラでの演奏においてさえ、ショパンの協奏曲はピアノとオーケストラがアンバランス、具体的にはピアノばかりが聞こえてくる、ということでも知られており、オーケストラ部分をより小さな弦楽アンサンブルで演奏した場合、現代のピアノを使うと、ピアノとのアンバランスが一層際だってしまう危険があるからである。今回浜松市楽器博物館所蔵の「ブレイエル工房製フォルテピアノ（一八三〇年）を使うことによって、一般論として現代ピアノよりもパワーで劣る歴史的ピアノが、室内楽のなかで弦楽器五挺と効果的なバランス

を産み出すことが期待された。この演奏の意義を理解し、浜松市の文化財である所蔵楽器を浜松だけでなく東京でも演奏できるようこの研究プロジェクトのために貸与したことは、同博物館館長・嶋和彦の英断として高く評価されよう。

1-3 小倉貴久子ら演奏者たち

こうした貴重な演奏のための最も重要なプレイヤーが、ブルージュ国際古楽コンクール・アンサンブル部門第一位など数々の受賞に輝き、今やフォルテピアノ（歴史的ピアノ）演奏の第一人者である小倉貴久子であった。小倉は、浜松市楽器博物館の歴史的ピアノのコレクションを使ったレクチャーコンサートやCD録音によって、このプロジェクトの以前から同館と協力関係を築いており、同館の歴史的ピアノについて知悉していた。第一ヴァイオリン奏者の桐山建志はメンデルスゾーンの内楽作品の小倉との共演で高い評価を得ており、チェロの花崎薫はこの時代のアンサンブル音楽に通じた名手である。そしてコントラバスの多彩な魅力を引き出す小室昌広、有望な若手として知られるヴィオラの長岡聡季、ヴァイオリンの白井圭が加わり、強力な演奏陣が整えられた。

1-4 東京公演とTAN

さて、大学および博物館の地元である浜松公演についてはともかく、東京公演については、会場となる演奏会ホールと、興行として成功させるための組織が必要であった。そこで、中央区の第一生命ホールの演奏会を企画し、小倉貴久子の演奏会シリーズも手がけてきたトリートン・アーツ・ネットワーク（TAN）が加わるようになった。学長研

究費の執行が決定したのは二〇〇六年五月であり、すでに〇六年度の公演スケジュールは固まっていたが、本研究の意義に鑑みて、ディレクター児玉真のもと、急遽TAN主催公演とすることが決定された。これによって本プロジェクトは、単に首都圏の室内楽ホールを借りるだけでなく、広報・チケット販売を含む経験豊富な演奏会マネジメント組織と連携することになった。なお第一生命ホールは、室内楽演奏会の長い伝統を確立してから、二〇〇一年に新しいホールとして再出発している。

2 研究成果

本研究の成果として、①地域・大学の広報活動としての成果、②芸術文化学科の教育活動としての成果、そして③西洋音楽史研究の視点からの成果がある。

2-1 地域・大学の広報活動としての成果

この研究を通じて、本学と浜松市楽器博物館の共同プロジェクトを告知する演奏会チラシが、浜松地域および首都圏のプレイガイド等で配布され、浜松地域の文化力をアピールした。首都圏の演奏会ではチラシ二万枚強が配布された。なお制作したチラシの総枚数は約五万枚で、この大部分が（公演終了後も現在に至るまで）浜松地域・本学の名前と結びついたこのプロジェクトについて知らしめる役割を果たしてきた。また、東京公演が本学・TAN／第一生命ホール主催となったことにより、無料広報誌『ぶらあぼ』のTANのページに本学企画の催しとして大きくとりあげられた（二〇〇六年二月号、三月号）。

こつした事前活動の基礎のうえに、本公演が入場者数の観点（付録一参照）のみならずその内容の点で評価された（付録二および三）ことで、浜松地域・本学の広報活動として、本研究は当初の予想を遙かに超える大きな貢献をしたと考えられる。もともとその総合的な評価——大学（ひいては芸術文化学科）の知名度の向上が確かめられるかどうかなど——のためには、プロジェクトが継続中（第3節参照）でもあり、なおしばらくの時間が必要であろう。

2-2 芸術文化学科の教育活動としての効果

今回のプロジェクトに、芸術文化学科の一〜三年生計八名が加わった。そのなかで最も重要であったのは、二〇〇六年三月二日に東京都中央区立日本橋小学校で行われたTAN主催のアウトリーチ活動である。ここに立ち会った学生五名は、TANの芸術普及活動を実地に体験しただけでなく、晴海のトリトン・スクエア内のTANにて担当者たちと意見交換する機会を得た。学生たちがこの日に出会った児童数人と東京公演直前の「ウエルカムセッション」で再会したことは冒頭に述べた通りである。こつした一連の企画・運営に参加することは、芸術文化学科の教育に本質的な学外実地体験として重要な意味を持っている。

2-3 西洋音楽史研究の視点からの成果

しかしながら本研究は、西洋音楽史の実践的な研究として、その最大の成果をもたらしたと言える。以下、第一に歴史的ピアノの使用について、第二に「トゥッティ」部分の演奏方法について述べる。

2-3-1 歴史的ピアノを使つての「室内楽版」演奏——その効果

近年シヨパンの《ピアノ協奏曲第一番》の「室内楽版」が「復活」して以来、その演奏の際には「確認される限り」常に現代のピアノが用いられてきた。この場合現代のピアノを使う難しさは、前述の通り、シヨパンの書法がそもそもピアノ・パートに音が多くオーケストラ（この場合は「弦楽五重奏」）部分が「薄い」ものであるため、パワフルな現代のピアノは基本的な音量で五挺の弦楽器を圧倒してしまい、アンバランスに響きかねない点にある。これに対して今回のようにピアノ独奏（歴史的ピアノ）を使った場合、高音域の音が現代ピアノのように明瞭には聞こえないなど、ピアノのプレゼンスは相対化される。ピアノは依然として音楽全体を主導する存在ではあるが、一人突出するのではなく、弦楽器群と折り合いながら音楽をつくる方向に自ずと向かってゆく。このようにピアノと弦楽五重奏の新しい関係を提示することができたという点で、本研究は単なる「実験」にとどまらず、シヨパンの名曲の新しい姿を提示することに成功したと言える。（もっとも、フレイエルのフォルテピアノが予想以上によく「鳴った」というコメントも聞かれた。）

2-3-2 「室内楽版」演奏の際の「トゥッティ」部分の演奏方法

さて、今回の研究を通じて、「モダン楽器」か「リリッド楽器」かに関係なく、シヨパンの協奏曲「室内楽版」の演奏のために重要なことがら確認された。「トゥッティ」部分のピアノの参加についてである。シヨパンの作品を含めて伝統的なピアノ協奏曲は「トゥッティ」と「ソロ」が交互に現れる音楽形式で作られており、一般的な演奏において「トゥッティ」はオーケストラのみが演奏してピアノリストが休止し、

The image shows a musical score for a chamber ensemble. It consists of six staves: Violino 1, Violino 2, Viola, Violoncello, Contrabasso, and Pianoforte. The score is written in 3/4 time and features various dynamics including *fz*, *p*, *f*, *ff*, and *cres.* The Pianoforte part includes markings for Flauto and Clarinet.

「ソロ」ではピアノストロが（オーケストラに伴われて）弾く。「室内楽版」で演奏しようとする、そのままではこの原則を貫くことができない。「室内楽版」では、管楽器の重要なフレーズが各々同じ音高の弦楽器のパート譜に転記されること が基本であるが、トゥッティのいくつかの箇所、管楽器の明らかに重要なフレーズが弦楽器のどのパートにも見られないケースがあるからである。解決法の一つは、そうした箇所、弦楽パート譜に管楽器旋律の転記が「欠落」している

と考え、楽譜には記載されていない旋律を（オーケストラ総譜から）補い、弦楽器に担わせるというやり方である。これまでにリリースされた録音のうち、ジャン・マルク・ルイサダ Luisada の演奏 (RCAN/BMG: 74321 632112 録音1998、発売1998) はこの方法を採用し、結果的にトゥッティ部分は弦楽器のみでの演奏になっている。この方法の利点は、トゥッティの間ピアノストロが完全に沈黙することによって、「ピアノ演奏はソロ」という通常の演奏慣習が維持されて聴き手になじみやすいほか、トゥッティ部分の弦のみの五重奏が一樣な響きを得られることである。

しかしながら、フル編成版のトゥッティで行われることをすべて弦楽五声部で吸収しようとする、弦楽器のパートの負担が増える。例えば第一楽章の冒頭トゥッティに問題の箇所がある。「室内楽版」の各パート（ヴァイオリン1、ヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ピアノ）をスコアにして示すと上のようになる。

ここで、「トゥッティは弦楽5声部のみで演奏する」という（ルイサダらが採用した）原則に立てば、この譜例でピアノパートに記されている本来フルートまたはクラリネットの旋律を、ヴァイオリンなどに弾かせ、弦楽器につきつきと受け渡させることになる。しかしこの音型、音程はどの弦楽器にとってもやっかいで、多くの弦楽器奏者が積極的に弾きたがらないタイプのものと言える。

今回の演奏に際して小倉たちは、基本的にこの譜例に示されたとおり、つまりドイツ初版に示されたとおり演奏した。すなわち、管楽器の重要なフレーズは、「室内楽版」演奏のために「弦楽器声部およびピアノ声部」に転記されている、と考えるのである。そのように考えたとき、たとえば上の譜例の箇所は、管楽器の旋律の弦楽器への転記が

「欠落」しているのではなく、「弦楽器には扱いにくい箇所はピアノに委ねる」という考え方が示された箇所と理解できる。

この発想は、「ピアノ協奏曲ではピアノはソプラノのみで演奏する」ということを常識として考えていると、なかなか受け入れにくい。ピアノ奏者としても、聴き手としても、オーケストラが演奏しているところで突然ピアノが中途半端に入ってきて、しかも消えていくことに違和感を覚えるだろう。しかし、「トゥッティではピアノは黙っているもの」と考えるのでは、とりわけこの時代までの協奏曲を理解する可能性が狭まることになる。そもそもショパンの時代の少し前まで、鍵盤楽器は通奏低音楽器としてトゥッティを統率する機能を果たしていた。ピアノは、一人で多様な役割を演じることができた楽器であり、あらゆる音域で、複数の声部も担うことが可能である。そのようなピアノの特性が発揮され、不足する楽器のためにすぐに代替ができることを示したのが、先の譜例の箇所と言えるだろう。そう考えたとき、一七八九／一八〇二年にダニエル・G・テュルク「バスが残した次の言葉は、強い説得力とともに響くことになる。

「ピアノ用楽譜の中に現れる、引用者注 ヴァイオリン、フルート、あるいはチェロなどという用語は、本来ピアノではなくそれぞれの楽器のために書かれた部分(たいてい小さな音符で印刷されている)の上に、時々見られる。それらがピアノ・パート譜に記されているのは、伴奏者が足りない場合ピアノで可能な限り演奏できるからである。(『ピアノ教本(原題 Kaverschule)』、一八〇二年第一版一五〇ページ)

ショパンの協奏曲「室内楽版」の演奏に際しての、トゥッティ部分でのピアノの積極的な参加という点では、近年の「室内楽版」の「復興」のなかではおそらく白神 Shiga 典子が嚆矢である(BIS 847 録音 1996、発売 1997)。ただし彼女が管楽器のフレーズを引き受けている箇所は、必ずしも先の譜例のような「ドイツ初版でピアノ・パートにのみ当該のフレーズが小さい音符で印刷されている箇所」とは一致しない。小倉の今回の演奏は基本的にドイツ初版に従っている。この点で今回の小倉の解決法と原則的に一致しているのは、二〇〇五年にリリースされたJ・フィアルコフスカ(Firkowska)らの録音である(ACD2 2291 録音 2002、発売 2005)。

もっとも、トゥッティ部分でピアノを多様に用いる白神のアイディアは、別の観点からみたととき今回の小倉の演奏と近かったとも言える。白神はトゥッティの大部分で通奏低音風に和音を弾いており、小倉も同様の効果を狙った箇所が一部あった。弦楽器が強奏するところで、それを強化すべく、和音で加わったのである。そのような部分でのピアノの参加は、全弦楽器の豊かな音量と歴史的ピアノの瞬発力が相まって、文字通り「トゥッティ(全員で)」の迫力を産み出していた。

3 今後の展望

本研究は、二〇〇六年度学長特別研究「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2」として継続することになった。二〇〇七年度の「3」をもって完結の見込みである。シリーズ化にあたっては、本研究の重要な点が継続されるよう配慮している。まず①浜松市楽器博物館の歴史的ピアノを使うことができ、②小倉貴久子今回の主要メンバーが出演可

能で、②主要演目としてピアノ協奏曲が室内楽編成で演奏される、という三点が不可欠である。さらに④芸術文化学科の教育に寄与し、⑤総体として浜松地域・本学の広報活動として機能することが求められよう。

浜松は、西洋の芸術音楽との多様な出会いを可能にするまちである。一方で今年度のピアノ・コンクールのような催しがあり、ピアノ製造技術・演奏技術の最先端を感じ取ることができるが、他方で楽器博物館と本学の連携によって、今回のように「世界に発信する」(岡田敦子)ような企画を作り出すことができる。その際、歴史研究を「知の楽しみ」として、アートを享受する喜びと結びつけることは、大学の課題にはかならない。

付録1 演奏会記録

ショパンのアンサンブルを、19世紀のサロンの響きで(小岩信治・平野昭監修「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」)概要

【演奏者】小倉貴久子(フォルテピアノ)、桐山建志(ヴァイオリン)、花崎薫(チェロ)、小室昌広(コントラバス)、白井圭(ヴァイオリン)、長岡聡季(ヴィオラ)

【演目】フレデリク・ショパン(一八二〇～一八四九)

《ノクターン》変ホ長調作品九・二

《バラード第一番》ト短調作品三三

《ピアノ三重奏曲》ト短調作品八

《ピアノ協奏曲第一番》ホ短調作品一一 ドイツ初版(一八三三年)に基づく「室内楽版」

【主な使用楽器】一八三〇年にパリのフレイエル工房で製作されたフォルテピアノ(歴史的ピアノ)。浜松市楽器博物館蔵

【浜松公演】

主催 静岡文化芸術大学・浜松市楽器博物館

・二〇〇六年二月二六日(日)午後二時 アクトシティ浜松音楽工房

ホール(座席数二二〇)

(午後一時一五分より 小岩信治のプレトーク)

・来場者数 一般一九四、学生二〇、招待六 合計二二〇(入場券完売)

・プレイベント 二月八日一八時 本学南三七九講義室 来場者数

三七。

・報道 『中日新聞』二月二七日朝刊

・演奏記録 浜松市楽器博物館より二〇〇六年一月に演目の一部を収録したCD(コレクシオンシリーズ10)発売。

【東京公演】

主催 静岡文化芸術大学・NPOトリトン・アーツ・ネットワーク

(TAN) / 第一生命ホール

・二〇〇六年三月一四日(火)午後七時 第一生命ホール(座席数七

六七)

・来場者数 一般二五八、学生六五、招待七八、シニア、合計四〇

二。

・アウトリーチ活動(TAN主催) 三月二日 於中央区立日本橋小学

校 出演Ⅱ小倉貴久子

・プレイベント 三月一日午後二時よりトリトン・アーツ・スクエ

アX棟5階会議室、プレイエル使用。出演Ⅱ小倉貴久子、レクチャー

Ⅱ小岩信治。来場者数九〇。

・報道 『ぶらあぼ』二〇〇六年二月号、三月号、『中日新聞』・『東京新聞』三月一五日朝刊、『シヨパン』五月号、『ムジカノーヴァ』五月号。

・演奏記録 『METSUHI ハイビジョンクラシック倶楽部』二〇〇六年五月一日。《ピアノ三重奏曲》第一章、《ノクターン》、《ピアノ協奏曲第一番》

【教育活動】

芸術文化学科学生（一〜三年生計八名）の見学・実習活動

・東京公演アウトリーチ打ち合わせへの参加（二月三日、一名）

・浜松公演イベントの補佐（二月八日、六名）

・浜松公演、楽器博物館員の補佐（二月二六日、五名）

・浜松公演後の録音セッションの見学（二月二六日、二名）

・東京公演アウトリーチ（於：中央区立日本橋小学校）見学およびトリトン・アーツ・ネットワークのディレクターとの意見交換（三月二日、五名）

・東京公演イベントの見学・補佐（三月一日、二名）

・東京公演、TANスタッフの補佐（三月一四日、四名）

・浜松公演、東京公演でのピアニストの譜めくり（二月二六日および三月一四日、一名）

付録2 浜松公演来場者アンケート結果のまとめ

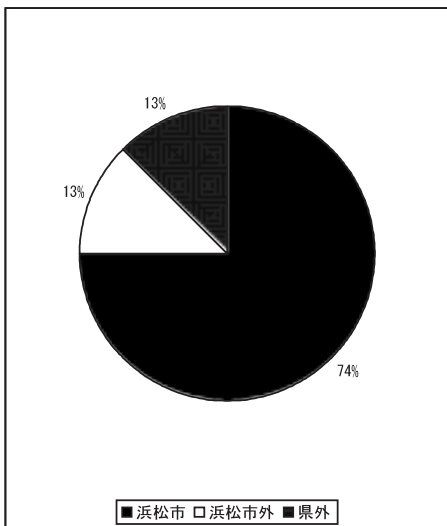
【概要】来場者のおよそ3割が回答したアンケートからは、次の点が指摘できよう。（質問1）大多数は浜松市から来場したが、首都圏を含む県外の来訪者（主に小倉貴久子のファンとみられる）もあった。（質問

2）年齢層の分布をみると、四〇代から六〇代がやや多い。対照的に一〇代が少なく、次回以降広報の強化が必要であろう。（質問3）演奏会の情報を得るための手段として、チラシが有効であることが明らかである。しかし本プロジェクトの特色として、大学関係者が広報のメディアとして機能しうることも、この結果は示している。（質問4）来場者はこの演奏会に高い評価を与えていることが読み取れる。

来場者220名中有効回答数64（29・1%）

質問1 お住まいはどちらですか？

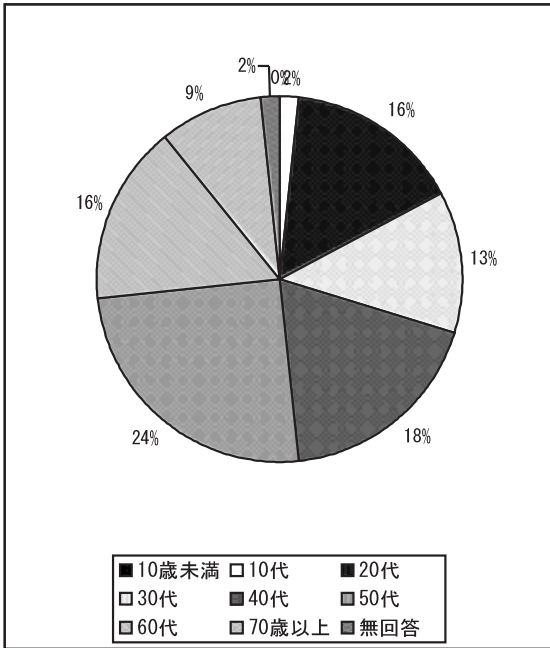
浜松市	4
市外・静岡県内	8
県外	8



質問2 あなたの年齢は？

- 10歳未満
- 10代
- 20代
- 30代
- 40代
- 50代
- 60代
- 70代以上
- 無回答

1 6 0 1 6 2 8 0 1 0

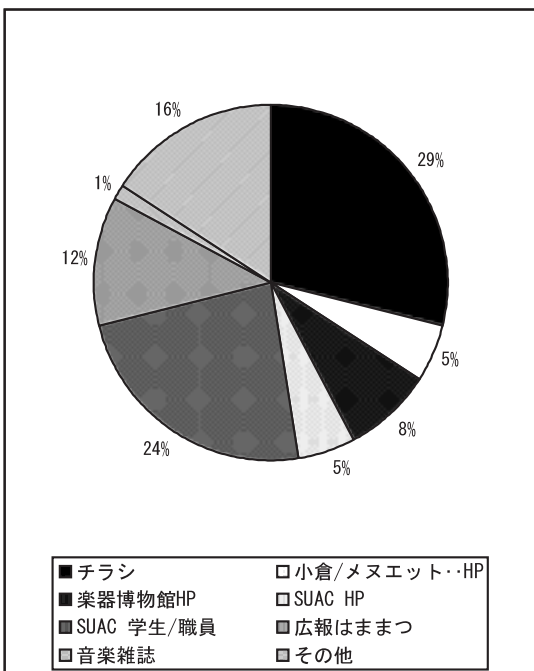


質問3 本日の公演についてどちらでお知りになりましたか？

- チラシ
- 小倉貴久子／メヌエット・テア・フリユージュル ホームページ
- 楽器博物館 ホームページ
- 静岡文化芸術大学 (SUAC) ホームページ
- 静岡文化芸術大学 (SUAC) 学生・職員から
- 広報はままつ
- 音楽雑誌
- その他

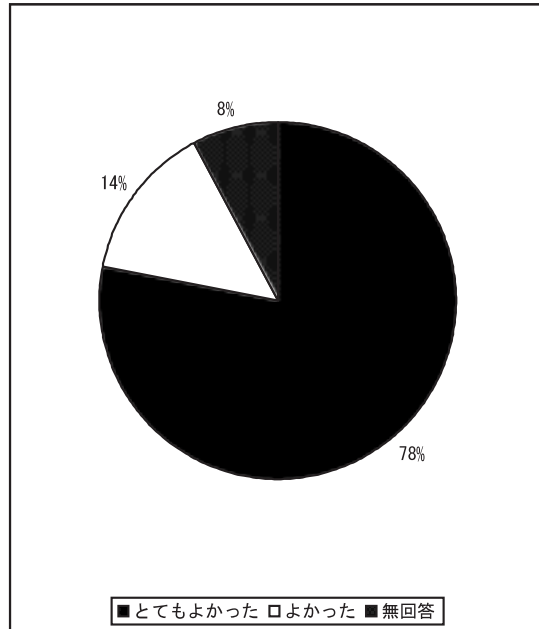
1 2 1 9 8 4 6 4 2 2

(複数回答可)



質問4 本日の公演はいかがでしたか？

とてもよかった 50
 よかった 9
 無回答 5



付録3 演奏会批評

『ムジカノーヴァ』（音楽之友社刊）二〇〇六年五月号

「シヨパンのアンサンブルを、19世紀のサロンの響きで」は、浜松にある静岡文化芸術大学が研究活動の一環として企画と資金を出し、浜

松市楽器博物館が所蔵楽器を東京へ送り出し、小倉貴久子（フォルテピアノ）をはじめ桐山建志（Vc）、白井圭（同）、長岡聡季（Cb）、花崎薫（Vo）、小室昌広（Cb）らスベシャリストたちの演奏を得て、第一生命ホールが共催公演として会場を提供した、まさに「浜松発、東京から世界へ発信するコンサート」である。大学、博物館、ホール、演奏家はそれぞれ単独でもコンサートを実現することができる。しかし、この四者がひとつの力となったとき、どれほどスリリングで充実した「音楽の場」が生まれることが。

今回、浜松から運ばれたピアノは、イギリス式突き上げ式アクション、シングル・エスケープメントの1830年製のプレイエルである。シヨパンはポールド時代にはドイツ式アクションのピアノを用いていたらしいが、1831年にパリに出るからは、イギリス式アクションのエールとプレイエルを愛奏し、とくに気分の良い日はプレイエルを弾いたと言われる。今回演奏されたのは《ピアノ三重奏曲》作品8、《ノクターン変ホ長調》作品9の2、《バラード第一番》、そして《ピアノ協奏曲第一番》で、いずれも1828〜35年の作品で、まさに演奏される作品と同時代のピアノである。

とくに興味深かったのは、メインの曲目である《ピアノ協奏曲》がオーケストラ伴奏ではなく、弦楽五重奏で演奏されたことだった。これは決して演奏者（経費？）を節約するためではなく、当時のピアノ協奏曲は、すべてのパート譜を買わなくても、弦楽器のパート譜だけを買って、そこに管楽器の重要な旋律が小さな音符で記されており、それらを補いつつ弾くことで室内楽編成でも演奏できたという事実から判断されたものである。当時、協奏曲はむしろそうした形態で広まっていった。つまりそれが「当時の響き」なのである。

プレイエルとこの室内楽編成でショパンのピアノ協奏曲を聴くと、まずはオーケストラ・パートが決して貧弱ではなく、各声部がそれぞれ自己を主張しつつピアノと対等に絡み合い、全体としてはむしろ複雑で密なテクスチャを作っていることが分かる。ちなみに弦楽器はモダン楽器だが、ガット弦を多く張り、モダンより張力の弱い当時のクラシック弓が用いられた。そのなかで、ピアノは現代のピアノに比べて音量こそ小さいが、一音一音の粒立ちがきわめて明瞭で、その軽くて明るく柔らかい音は弦楽器とよくなじむ。各楽器が溶け合っただけでなく、それぞれが分離して聴こえながら、一方が他を圧することのない、バロックのアンサンブルのような自由さがそこにはある。

とくに印象的だったのは、ショパンというとまずカンタービレな旋律の美しさが頭に浮かぶのだが、それにも増して、第1楽章展開部や第3楽章で繰り広げられる音階や分散和音などによる速いパッセージの連続が抜群の演奏効果を示すことだった。はるかに鍵盤が重く、音の立ち上がりが遅い現代ピアノでは、鍵盤を打ち抜くように弾く和音やオクターヴが圧倒的な迫力をもつのに対し、速い運動的なパッセージはどうしても軽く聴こえてしまう。しかし、鍵盤が軽く、音の立ち上がりの速いプレイエルでは、和音よりむしろ急速なパッセージのほうが楽器もよく鳴り、圧倒的なヴィルトゥオソ性が発揮される。

しかも、そういうパッセージはショパンではつねに非和声音を含んでおり、それが演奏困難さの一因でもあるのだが、プレイエルではその細部までがよく聴こえ、つぎつぎに現れるパッセージの変化を追ううちに大変なスリルとスピード感を味わえる。この点に関し、腕や身体全体を使おうとするモダン・ピアノリストより、もっと手首から先の

ほうにタッチの要点があるフォルテピアノ奏者としての小倉貴久子の奏法ははるかに有利にみえた。

ショパンは古典的な作曲家だというが、その一面がこうした音の身振りそのものに浮かび上がったことも含め、通俗的なショパン観をちよっと揺さぶるコンサートだった。〈岡田 敦子〉

『音楽の友』（音楽之友社刊）二〇〇六年五月号

ショパンのアンサンブルを19世紀のサロンの響きで

小倉貴久子による、浜松市楽器博物館所蔵の1830年製プレイエル・ピアノを使ったショパンのコンサート。

まずは小倉と桐山建志（ヴァイオリン）、花崎薫子（チェロ）による「ピアノ三重奏曲」。楽器の特性だろうがやはり軽やかで華やか、また上品な響きに音場が満たされる。この作品は若書きということもあって、各楽器の旋律線が一定の方向を向いていないためアンサンブルとしての構築には多少困難があるが、この楽器を組み合わせると不思議と調和し、説得力がある。音色変化もグラデーショナルを描くように幅広いし、おそろくタッチも相当軽いのだろう。

ピアノ・ソング「ククタン」Op.9-2や「バラード第一番」では、煌めくような高音、伸びやかな中音域、そして存在感のある低音と、それぞれがくっきりと主張しながら見事な和声感を織り成す。

白井圭（ヴァイオリン）、小室昌広（コントラバス）を加えた弦楽五重奏が伴奏する「ピアノ協奏曲第一番」も、端正で隙のない構築、洗練された艶やかな音色、そして自由なルバートを駆使し、抒情が心に染み入るようなショパンを映し出した。（3月14日・第一生命ホール）
〈真嶋 雄大〉

『ショパン』（ショパン社刊）二〇〇六年五月号

情感あふれる音楽——ショパンのアンサンブルを19世紀のサロンの響きで

浜松市楽器博物館のフォルテピアノを使用した演奏会が、東京で行われた。このフォルテピアノは1830年のブレイエル製で、小倉貴久子が演奏した。プログラムは、すべてショパンの作品による。小倉のソロでは、ノクターン第2番とバラード第1番が披露された。フォルテピアノは、ひとたび打鍵すると、現代のピアノとはその音質だけではなく、音量や残響の減衰などがまったく異なる。小倉の演奏は、この時代の楽器の表現を十二分に生かしていた。残響や自然倍音の美しい共鳴に耳を澄まし、音と音とのつながりを配慮して、大きなスケールをもって音楽を捉え、潤い豊かな響きを生み出した。これは、彼女が常日頃、フォルテピアノという楽器とともに生きているからこそできる技である。小倉の情感あふれる音楽には感服である。アンサンブル作品からは、ドイツ初版に基づく弦楽五重奏伴奏によるピアノ協奏曲第1番とピアノ三重奏曲。プログラム後半で演奏されたピアノ協奏曲第1番は、コントラバスを含む編成で、各弦楽器はフォルテピアノを絶妙に引き立てており、なかなかの好演であった。一方、プログラム冒頭のピアノ三重奏曲では、各演奏者の熱演がひしひしと伝わってきた反面、音質や音量における不均衡さを感じざるを得なかった。弦楽器の奏法や音質（楽器の扱いに関して）と、19世紀のブレイエルの音質との間に、微妙な溝が感じられ、ブレイエルという楽器に即したアンサンブル作りに、もっと工夫が行き届いてもよかったと思う。たとえば、三重奏の演奏では、音の減衰が早いフォルテピアノを考慮して、楽器をもう少し舞台上前に配置するなどの工夫があってもよい

だろう。しかし、当夜の演奏会は演奏者全員の高く、企画自体も興味深いものであった。（3月14日 第一生命ホール）〈道下京子〉

SUAC Chamber Music Concert 1: Fryderyk Chopin's Piano Concerto in its "Chamber Version"

Shinji KOIWA
Lecturer, Musicology

Akira HIRANO
Professor, Musicology

The 1st SUAC Chamber Music Concert series took place on February 26, 2006 in Hamamatsu (Act City Ongaku-Kobo-Hall), and March 14, 2006 in Tokyo (Daiichi Seimei Hall) successfully. The hall in Hamamatsu was full (there were 220 visitors). The concert in Tokyo was also well visited and broadcast afterwards on the NHK BS. It was a unique collaboration of SUAC, Hamamatsu Museum of Musical Instruments, NPO Triton Arts Network/Daiichi Seimei Hall, and internationally renowned musicians including Kikuko Ogura (fortepiano).

The concert displayed an important part of the academic research of the writers who specialized in chamber music with piano in 19th century Europe. In the 1830s, Fryderyk Chopin's piano concertos were published and sold not only as orchestral music but also as music for piano sextet (SUAC Bulletin 2004). The main piece at the concert, Chopin's piano concerto in e-minor opus 11, based on the first German edition (1833), using a Pleyel fortepiano (1830), stimulated and excited the audience. The performance amply proved that the "chamber version" of piano concerto was able to exert its distinctive attraction which the usual orchestral version does not possess.
